

第IV部門

富田林における歴史的市街地の形成と残存要因に関する研究

大阪工業大学工学部 学生員 ○宮久保 貴士

大阪工業大学工学部 学生員 佐藤 利秀

大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. はじめに

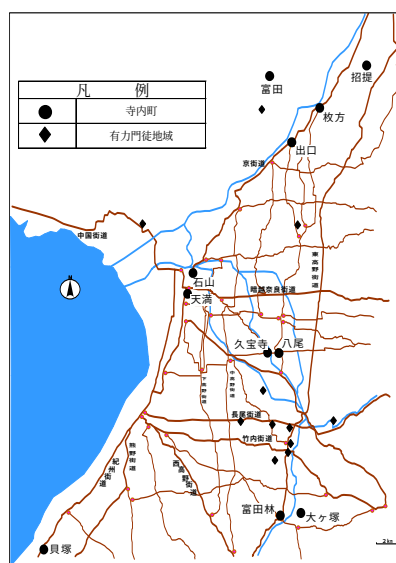
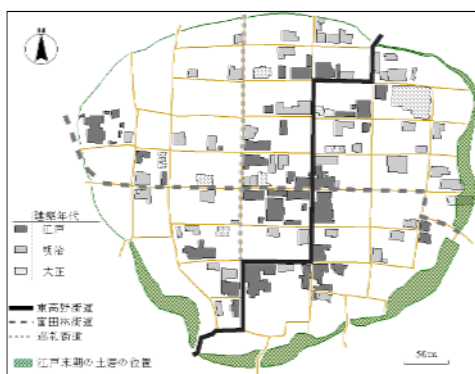
中世から近世にかけて大阪平野では寺内町という宗教自治都市が数多く存在した。その中の富田林は現在でも寺内町の名残を色濃く映し出す歴史的な市街地が存在する。そこで、今回の研究では富田林がどのようにして歴史的市街地を形成し残存するに至ったのか、その要因について明らかにする。

2. 富田林の史的特性

(1) 寺内町富田林の成立と発展の要因：寺内町は中世後期に発達した真宗寺院を核とした宗教都市であり、戦国時代に相応しく回りを堀や濠で囲むなどの軍事形態を取るとともに、領主から商業上の保護を受けていたことなどから各地から商人が集まり商業都市として繁栄し、大阪平野にも広く分布していた(図2-1)。

その中で富田林寺内町は1558年に南河内地方の石川谷に建立され、寺内町のすぐ南には石川が流れ、南北には東高野街道、東西には富田林街道が走る水陸交通の要衝にあって周辺農村から集められた八人衆を中心として開発が進められ建設により、商業都市としての郷を形成し集積を高めていた。

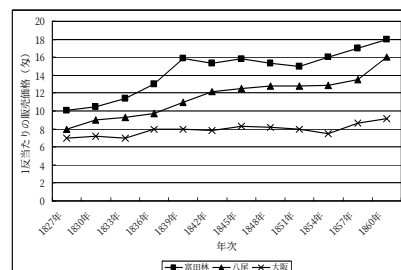
この集積発展には主要街道の関係が大きいと考えられ、つまり、かつて豪商で

図2-1 大阪平野の寺内町¹⁾²⁾図2-2 街道と富田林³⁾⁴⁾

あり現存する家屋などは東高野街道沿いに高く集積立地していることなどから、近世期、東高野街道は富田林にとって特別なもので、富田林の町場は街道によって支えられ繁栄したといえる(図2-2)。

(2) 卓越した販売網の形成と維持：富田林の近世の繁栄は特別な商品作物に支えられていたわけではなく、商品の流通によって支えられた。隣接している寺内町である八尾と久宝寺が繁栄と衰退といった対極の道を進む結果となったのも販路の違いによるものと考えられ、近世期、都市の発展には商品流通が重要な役割を担っていたといえる。

商品の流通を河内地方の代表的な商品作物である木綿を例にすると、富田林は大阪市場では無く近江市場と取引を行っていた。近江商人は大阪商人に比べ木綿の高価格で買取っており、近江市場との取引は有益なものであったといえる(図2-3)。

図2-3 木綿販売価格の比較⁵⁾表2-1 富田林木綿問屋の取引先⁶⁾

	1821年	1854年	合計
彦根	28	36	64
長浜	17	17	34
高宮	15	11	26
大津	15		15
八幡	2		2

表2-2 八尾木綿問屋の取引先
(1730～1800)⁶⁾

	I期	II期	III期	合計
八幡	16	8	30	54
長浜	2	16	23	41
奥村	1	4	12	17
八日市	6	2	1	9
その他	11			11

また、近江市場へは八尾の木綿問屋も販売を行っていたが、富田林は近江地方の中でも城下町の彦根や宿場町の高宮(現彦根市)などに独占的に販売することができた(表2-1・2)。取引回数が最も多い彦根藩の近江商人は、近世期、御用金を払うことで苗字帯刀が許され、郷土の待遇を与えられるなど優遇され特別な存在であった。つまり、富田林は有益な近江市場において特別な近江商人と独占的に取引を行えたことで富田林の木綿問屋は木綿の高価販売が可能になり、その結果、南河内の木綿集散地として一層の地位を確立できたのであった。

近江地方の他にも小商人は紀伊国や熊野などに販売先を持ち、東高野街道を通じて富田林は卓越した販路網を形成し堅持することができた。

(3) 近代における歴史的市街地の残存特性：昭和 10 年頃の富田林は商業店舗が立ち並び、商業地として繁栄していた(図 2-4)。しかし、昭和 47 年頃になると全体的に商業店舗は減少し、特に富田林街道以南では減少が著しい(図 2-5)。これは、旧寺内町の北部に位置する富田林駅周辺の開発による影響を受けたものである。鉄道の開通は近代市街地の形成に強く関わっているが、幹線鉄道(国有鉄道)が開通した八尾市域に比べ、富田林への鉄道は幹線鉄道の支線的な役割であったことや旧寺内町から北部に離れて設置されたため、鉄道開通による旧寺内町への市街地化圧力は比較的緩慢であり、このことが旧市街地残存に働いたことも見逃せない。

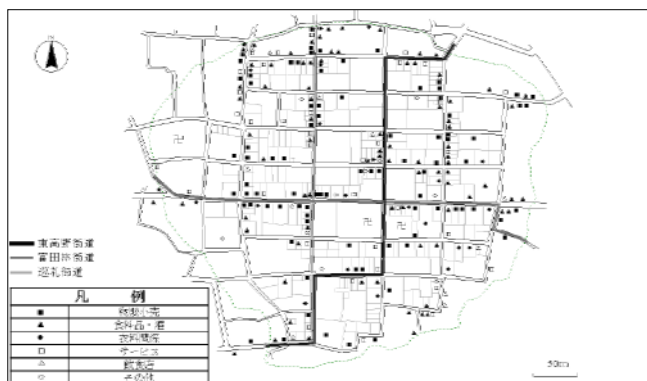


図 2-4 昭和 10 年における富田林の商業分布図 7)



図 2-5 昭和 47 年における富田林の商業分布図⁸⁾

３．現在の住民の保全意識

現在の富田林歴史的市街地に対して住民はどのように町並みを評価し保全に対する意識を持っているのかについて、アンケート調査を行った⁽¹⁾。これによると歴史的・伝統的・文化的価値の継承や、行政の積極的な行動による歴史的市街地らしい雰囲気創出によって

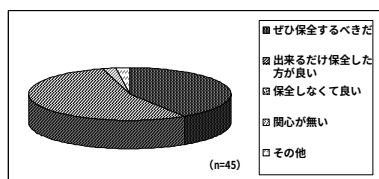


図 3-1 住民の保全意識

住民の保全意識は向上し、現在非常に高い保全意識を住民が保持していることが分かった（図 3-1・2・3）。よって、ソフト面・ハード面の歴史的市街地の残存には、住民の強い保全意識とこれを支えた行政の努力が大きく関わっていることが分かった。

4. 結論

①中世末に主要街道に貫かれ高い集積を持つ町場を形成した。②近世から近代初期にかけての繁栄は全国販路を持つ近江商人と取引を行うなど、地域商人との強固な販路網の形成と堅持によるものであった。③近代以後において鉄道開通による都市的開発の影響を大きく受けなかったことが歴史的市街地残存の一要因となっていた。④歴史的な町並みを保存し得た地域社会の要因として住民の高い保全意識と行政の積極的な保全活動が大きく関わった。

富田林は他の地域とは異なる特別な歴史的背景を持つことで、町場として近代に至るまで機能したこと、現代における住民の保存意識の高さと行政の支援の二要因によって歴史的市街地の形成・残存を可能にしたのである（図4-1）。

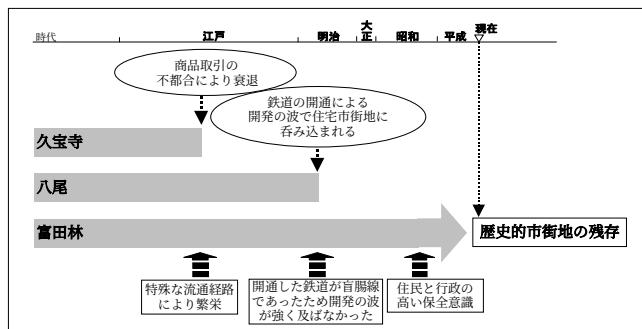


図 4-1 歴史的市街地の残存要因

[注釈]

(1)アンケート方法を以下の表に示す。

付表-1 アンケート調査内容

実施時期	2005年10月31日～11月6日
実施場所	富田林旧寺内町内の第二種保存区域に居住する普通世帯
調査方法	該当世帯にアンケート調査票を配布し、
配票・回収数	アンケート配票数48、回収票45

[参考文献]

1)「大阪の街道と道しるべ」 著：武藤善一郎 2)「中世末の畿内における寺内町の成立と変遷に関する研究」 著：日向進他 3)「富田林市史第二巻」編：富田林市編集委員会 4)「富田林寺内町歴史の町並み保全計画調査報告書」 出版：富田林市 5)「近世後期河内における木綿流通の展開」著：金井修平 6)「河内木綿の販路」著：棚橋利光 7)「じないまち瓦版」著：寺内町を守り育てる会 8)「富田林市史第三巻」編：富田林市編集委員会 他

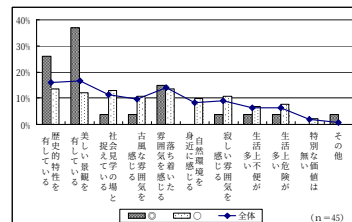


図 3-2 旧寺内町に対する住民意識

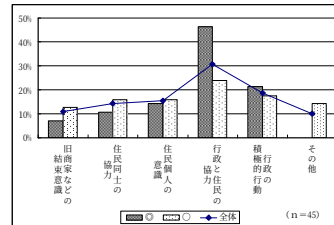


図 3-3 歴史的市街地の保全理由